

今週の為替相場見通し(2024年10月15日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ	
		注	レンジ	終値		
米ドル	(円)		147.35 ~ 149.58	149.12	148.00 ~ 152.00	
ユーロ	(ドル)		1.0900 ~ 1.0997	1.0936	1.0780 ~ 1.0980	
(1ユーロ=)	(円)		161.93 ~ 163.58	163.11	161.50 ~ 166.00	
英ポンド	(ドル)		1.3011 ~ 1.3133	1.3067	1.2950 ~ 1.3250	
(1英ポンド=)	(円)	*	192.89 ~ 195.63	194.88	192.00 ~ 197.00	
豪ドル	(ドル)		0.6702 ~ 0.6810	0.6751	0.6680 ~ 0.6880	
(1豪ドル=)	(円)	*	99.09 ~ 101.42	100.67	98.50 ~ 102.50	

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 西 拓也

(1)今週の予想レンジ: 148.00 ～ 152.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

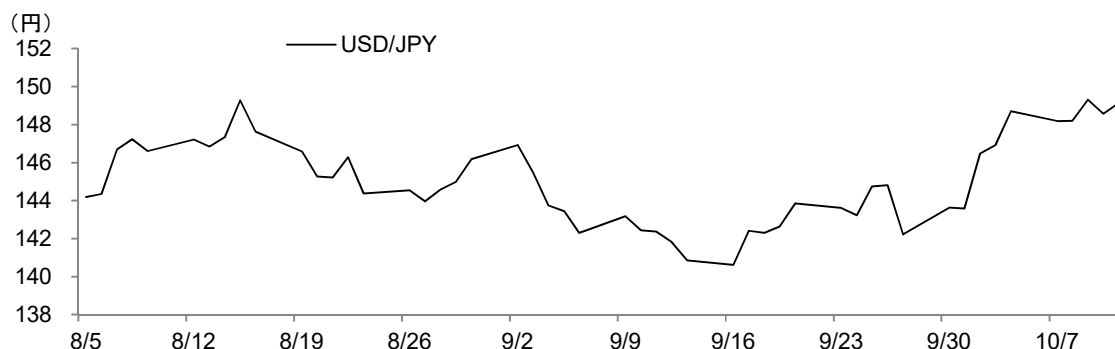
先週のドル/円は底堅く推移し、約2か月ぶり高値を更新。週初7日、ドル/円は148.78円でオープン。朝方は前週末の米9月雇用統計の余波で買われるも、三村財務官の円安牽制発言によって148円台前半まで下落。海外時間は中東情勢悪化や米株下落を背景に147円台後半へ続落。8日、日本株の軟調推移や米金利低下を受けて、ドル/円は上値重く推移。海外時間は、国慶節明けの中国で発表された追加の景気刺激策が期待外れとなったことで香港株が大幅下落。ドル/円も一時週安値となる147.35円まで下落。9日、中国財政省による景気刺激策期待が再燃しクロス円を中心に上昇。米金利上昇につれてドル/円は149円台前半まで続伸。10日、注目された米9月消費者物価指数(CPI)が予想を上回り、一時8月2日以来の高値となる149.58円まで急伸するも、米新規失業保険申請件数の悪化が意識され148円台前半まで下押した。11日、ドル/円は148円台後半を中心に小動き。海外時間、米9月生産者物価指数(PPI)は前月比が予想を下回ったことで初動はドル売りとなったが、前年同月比では予想を上回り反発。その後、10月ミシガン大学調査の1年先期待インフレ率(速報)の予想を上回る結果に、149.28円まで上値を伸ばした。午後は連休を控えて動意に乏しい推移となり、結局149.12円で越週した。14日、日米休場の中、米株の堅調推移を横目に149.98円まで上昇した。

今週のドル/円は、底堅い推移を予想する。ドル/円相場は米9月雇用統計の力強い結果を受けて140円台後半に上昇して以降、節目の150円を視野に上昇地合いを維持している。米9月CPIを無難に通過しインフレ再燃は回避され、米雇用市場への過度な警戒も解かれており米経済はソフトランディングを見据えつつある。米利下げペースは想定よりも緩慢との見方が優勢となってきており、次回11月会合では金利据え置きの可能性も台頭した。今週17日(木)に公表される米9月小売売上高は前月比+0.3%と前月から改善が予想されており、米国経済の堅調さが確認されればドル買い継続となろう。また、今週はFRB高官の発言機会も多く、年内の利下げペースを睨んだ相場展開となりそう。本邦サイドでは、18日(金)に公表される本邦9月CPIはコアベースで前年同月比+2.3%と前月からの鈍化が予想されている。予想程度の結果となれば日銀による早期利上げ期待が更に後退し、円ロングポジションを抱える投資家のポジション解消を伴った急速な円売り圧力となりやすく、注意すべきである。ただ、足許の円安進行に対し本邦当局者からの円安牽制トーンは徐々に高まっており、それが上値を押さえる可能性もあると見ている。

(3)先週末までの相場の推移

先週(10/7～10/11)の値動き:

安値 147.35 円 高値 149.58 円 終値 149.12 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 鈴木 智大

(1) 今週の予想レンジ: 1.0780 ~ 1.0980 161.50 ~ 166.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

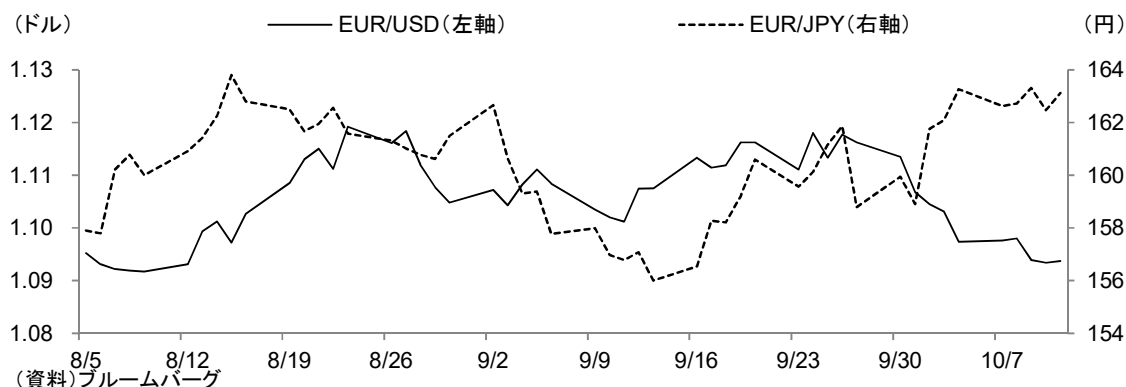
週初7日のユーロ/ドルは1.0970でオープン。早朝の三村財務官の円安牽制発言を受け、クロス円全般がやや下押す場面が見られるも、ユーロ/ドルに大きな影響は出ず。終日を通して1.09台後半で方向感なく推移した。8日は独8月鉱工業生産の好結果を中心としたサポートにじり高推移となり、一時週高値となる1.0997まで上昇。ただ決定打に欠ける内容に、節目となる1.10を前に押し返され、上値の重さが意識される値動きとなった。9日は中国の経済刺激策に関するヘッドラインでややリスクオン寄りの動きが強まるも、ユーロ/ドルの反応は限定的。その後の米9月FOMC議事要旨の内容に、1.09台前半まで下押す展開。10日は米9月消費者物価指数(CPI)と米新規失業保険申請件数の強弱まちまちな結果に上下動。一服後しばらくして、一時週安値となる1.0900まで下落するも、節目となる同水準では下げ止まり、1.09台前半まで値を戻して引けた。11日は米9月生産者物価指数(PPI)の結果などを受けて再度上昇する場面も見られたものの、1.09台半ばでは上値重く推移し、1.0936で越週した。週明け14日は日本、米国が休日で薄商いの中、淡々と続くドル買いに押され、じり安の展開。一時1.0888まで水準を下げた後、ほどなくして1.09台を回復するも上値は重く、1.0909でクローズした。

今週のユーロ/ドルは軟調な推移になることを予想する。17(木)に予定されているECB政策理事会は、当初は政策金利の据え置きを予想する向きが見られたものの、インフレの鈍化が顕著になっていることやドイツの製造業をはじめとする域内の景況感の悪化等を背景に、現在は▲25bpの利下げ実施がほぼ織り込まれている。リセッションへの懸念も再燃している上、中東情勢を中心とした地政学リスクも残存している状況下、当局もタカ的な情報を発信することを躊躇う環境だと考える。当面継続しそうな様相を呈している緩和姿勢が、ユーロの下押し要因として作用するだろう。一方米国は、軒並み予想を上回る結果となった4日の米9月雇用統計以降、年内の利下げ織り込みが2回程度まで後退。金融引き締めを経済への影響がそこまで顕著に現れていないことに加えて、一部当局者からはデータ次第とはしつつも、11月会合での利下げ見送りの可能性が言及されるなど、ドル買いを促すような材料はまだ健在。欧州圏と米国の、主に経済状況を背景とした金融政策に対する見通しの差異が、ユーロには逆風になると考えている。また今週の経済指標として、15日(火)の独10月ZEW景気期待指数、18日(金)ユーロ圏8月ECB経常収支の結果には注目をしておきたい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/7~10/11)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0900	高値 1.0997	終値 1.0936
(対円) 安値 161.93	高値 163.58	終値 163.11



3. 英ポンド

欧州資金部 神田 史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.2950 ~ 1.3250 192.00 ~ 197.00 円

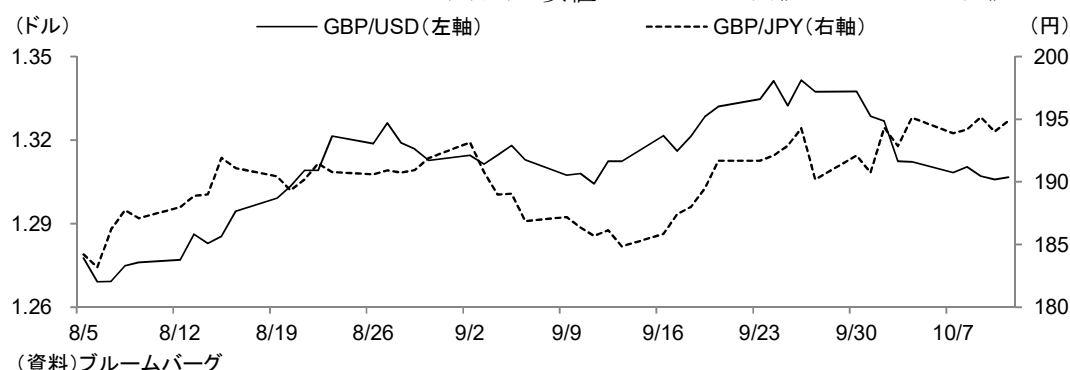
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、小幅に下落。週初7日は1.31台前半で取引を開始。前週末の米9月雇用統計を受けた米利下げ期待の巻き戻しに押されポンドは弱含み。1.30台半ばまで押される。翌8日は、中国当局の景気刺激策が市場の期待に届かないとの見方から香港株市場が急落しリスクオフムード。米株先物が切り返すとポンドもやや値を戻し1.31を挟んだもみ合いに。9日は、FOMC議事要旨(9月会合分)が発表されるも影響は限定的。10日は米9月消費者物価指数(CPI)が予想を上回る中でドル買い優勢となり週安値の1.3011をタッチするも、FRB高官の冷静な反応が報道されるとポンドは持ち直し。11日は、米9月生産者物価指数(PPI)の好悪入り混じる結果に上下に振れ、結局1.30台後半で週末を迎えた。対円ではレンジ内でもみ合い。概ねドル/円の動きに沿った動き。194円台で週の取引を開始し、週前半はリスクオフの円買いに193円を若干割り込むも下げ止まると、週後半にかけては再び194~195円での取引となり、195円付近で週末を迎えた。

今週の英ポンド相場は、上値重いながらも底堅い推移を見込む。英国はいくつかの主要指標が発表となるが、中では16日(水)の英9月CPIがやはり注目か。本稿執筆時点で、スワップ市場で見込まれる11月の英利下げ確率は9割程度で、同市場の反応がキーとなる。一方でFRBの11月利下げ織り込みは週末時点で8割を割り、先週末に比べると2割程度下がっており、ポンドの底堅さをサポートする要因。なおECBが先んじて17日(木)に政策金利を発表する。現時点で織り込まれる利下げ確率は9割超となっており、直近の域内インフレの低下を鑑みれば予想外のタカ派化のサプライズは起こりにくく、ユーロ変動につれたポンドへの影響も限定的とみている。中国当局が週末12日(土)に発表する追加の刺激策は既に市場では失望感が織り込まれていることもあり、どちらかというポジティブサプライズのリスクを見ている。先週の動きを見るに、株式市場のリスクオフ方向はポンド売り、リスクオン方向はポンド買いの反応となるため、後者の上方リスクに留意したい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/7~10/11)の値動き: (対ドル) 安値 1.3011 高値 1.3133 終値 1.3067
(対円) 安値 192.89 高値 195.63 終値 194.88



4. 豪ドル

金融市場部 グローバルGIチーム 田川 順也

(1) 今週の予想レンジ: 0.6680 ~ 0.6880 98.50 ~ 102.50 円

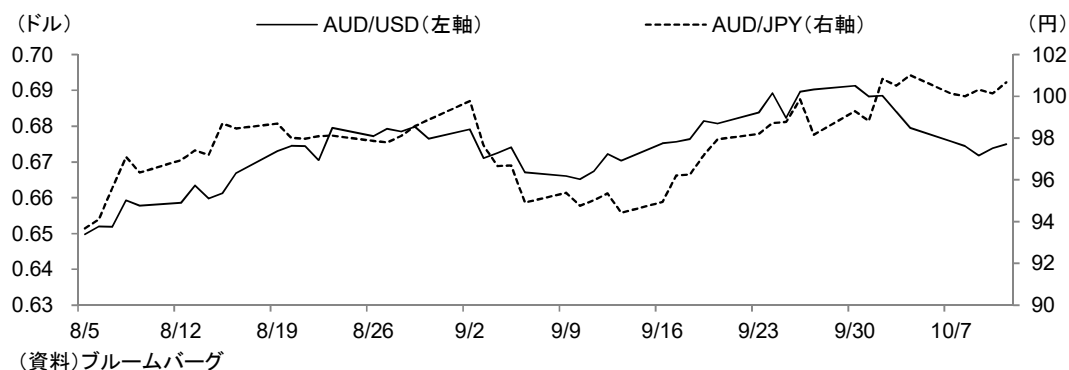
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル/米ドルは軟調な推移だった。前週末北米時間での米9月雇用統計を受け、大きく下落した後、週明け月曜日のAUD/USDは0.6797で東京時間オープン。豪州休場にあたり、動意なく展開する中でつけた0.6810が週間高値に。欧州時間に入ると株式市場が軟調、また米債利回り上昇も相まって下押し、一時0.6750を割り込む。火曜は東京時間朝に一旦0.6769まで戻すも、中国国家発展改革委員会が財政政策を具体的に示さなかったことに対する失望から人民元が急落。AUD/USDも連れ安の展開、0.6715まで下落した。ただ、北米時間に入り、米株が上昇するとAUD/USDも底打ちを見せた。水曜の東京時間、注目されていたNZ中銀政策会合では▲0.50%利下げが決定された。コンセンサス通りとなったものの、完全には事前織り込みができていなかったNZD/USDが売られる流れにAUD/USDも下落。ただ、その後は前日見送られた中国財政政策について12日に記者会見を行うとのヘッドラインにAUD/USDは0.6762まで急伸も、一時的な動きに終始。木曜は東京時間午後にかけて小幅堅調もどちつかずの展開。北米時間に発表された米指標がまちまちの結果となり、発表直後の値幅が出た中でつけた0.6702が週間安値に。金曜はもみ合い後、北米時間に発表された米指標がこの日もまちまちな内容に上下に振れたが、結局0.6751でNY市場クローズとなった。

今週の豪ドル/米ドルは底堅い展開を想定。豪州8月消費者物価指数(CPI)では3年ぶり低い伸びを示したものの、電気補助金という特殊要因があったことや、ここもとの中東情勢による資源価格への影響に鑑みるに、豪州物価が落ち着いたと判断するには尚早だろう。また同じく8月の雇用統計でも労働市場のひっ迫が確認されており、グローバルに利下げの局面を迎え、隣国NZでは▲0.50%の利下げが敢行されたことに比べ、豪州にはコントラストがつく。また中国株式市場がしっかりとしている中では売られにくいだろう。経済指標関係では、豪9月雇用統計が予定されているが、豪中銀がインフレ指標に注目しているだけに雇用統計は為替市場では材料視されないのではないかと。他の国では、米9月小売売上高は前回GDPで家計所得の伸びが良好となっており、また土台米景気後退に対して楽観視されている中、それを肯定する内容となるかが焦点。中国7~9月期GDPについては減速がコンセンサスで、着地がどこになるのか、という点も重要だが、仮に悪かったとしてそれが追加政策期待につながる展開も視野に入る。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/7~10/11)の値動き: (対ドル) 安値 0.6702 高値 0.6810 終値 0.6751
(対円) 安値 99.09 高値 101.42 終値 100.67



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。